

フッサールにおける人間的主観性の自我論的構造

—— そのパラドクスをめぐって ——

高 階 勝 義

(昭和52年5月31日受理)

(一)

フッサールの現象学は純粹な自我論 (Egologie) として出発する。彼がそうすることで、あえて独我論や心理主義あるいは相対主義といった予想される危険に身をさらす⁽¹⁾のは、それが「真に徹底した哲学」の方法的要請だからである。⁽²⁾ 絶対的に基底づけられた普遍学としての哲学を創始せんとするフッサールにとっては、その理論構築のための「アルキメデスの点」はデカルトにとつと同様に、必当的明証性としてのわたしの「唯一の自我 (solus ipse)」、「われ在り (Ich bin)」をにおいてはありえなかった。⁽³⁾

絶対的に確実な明証性の基盤を獲得するための方法的態度としての現象学的判断停止 (phänomenologische ἐποχή) において、そもそもそれを遂行するのはわたしであり、その遂行を通していまわたしに妥当している世界をもつばわたしの世界現象に還元し、しかも世界をそのような現象として省察しているのもまさにわたしである。したがってこの限りでのわたしは現象学的エポケーによってすべての世界的客観的存在がわたしの主観的な意識体験流に還元されるときできえも、世界に〈わたしに対する世界 (Welt für mich)〉という意味を与えている超越論的生の自我極として、わたしにとって意味をもつすべての自然的現実的存在を超えている自我である。⁽⁴⁾ その意味でフッサールは「わたしの唯一の自我」、「われ在り」はたとえ世界全体が存在しないとしてもそれ自体として措定されうる必当的に確実な明証性の存在領域であると見做すのである。⁽⁵⁾ 彼が『デカルト的省察』において、「現象学の唯一の対象は哲学的に思索するものとしてのわたしの超越論的自我 (transzendentes Ich) であり、またそれではありえないようにみえる⁽⁶⁾」と語り、普遍学としてのその現象学的哲学の構想のいわば成否をうらなう試金石ともいふべき「相互主観性 (Intersubjektivität)」論の展開においても、困難な情況が予想されるにもかかわらず、結局は自我論的主観性 (egologische Subjektivität) の本質構造の解明から出発し、それによって他者経験論を基礎づけるという方途をとらざるをえなかった事情もまさにここにあったのである。⁽⁷⁾

しかしこのように自我論に基礎をおくフッサールの超越論的現象学の構想はその理論展開の過程において困難な方法論的問題に逢着することになる。現象学的エポケーはさしあたり世界に共属し

ている主観—客観の相関を超える態度としての超越論的な主観—客観の相関に向かう態度をわれわれに与えてくれる。これによってわれわれは「われわれに対してある世界はその存在の仕方と存在からいってわれわれの世界であり、まったくわれわれの志向的生からその存在意味を汲みとっている⁽⁸⁾」という認識や「わたしは世界に〈わたしに対する世界〉という意味を与えている超越論的生の自我極である⁽⁴⁾」という洞察も得るのであるが、しかし現象学的還元を遂行しつつ、そのように考察しているわたし自身はその場合でも自然的人間として存在するというをやめるわけではないのである。⁽⁹⁾ したがってここにはわれわれが素朴な自然的態度にとどまる限りでは、とうてい超越しがたい「人間的主観性」のパラドクスがかくされているのである。フッサールはそれを次のように表現している。「世界の部分的成素である人間的主観性が、いかにして全世界を構成するのか。すなわちその志向的形成体として全世界を構成することになるのか。……………そうならば世界の成素である主観がいわば全世界を呑み込むことになるし、それとともに自己自身をも呑み込むことになってしまう。これは何という背理であろう。⁽¹⁰⁾

ここでフッサールが問題にしようとしていることは人間的主観性と世界との間の世界内部的な相関関係のうちにひそんでいる不可解な謎なのではない。彼は素朴な人間学的、世界内部的自己省察によっては克服しがたい背理にみえるそのような人間的主観性のパラドクスを超越論的に徹底的に省察することによって、そこにかくされている主観性と世界との内奥的な相関関係を顕らかにしようとするのである。そこで彼はさしあたり、「世界に対する主観性である」と同時に「世界のうちに客観的、世界内部的にも存在する」という人間的主観性の両義的構造に注目し、そのパラドクスの深層の意味をまさにその相互関係において説明するという仕方での謎解きを展開する。そしてその試みは、フッサールにおいてはとりもなおさず、真の自己認識と世界認識へ導びく方法的態度としての超越論的現象学的還元の理念をその完全な自己理解にもたらず過程としてもみなされていたのである。⁽¹¹⁾

われわれは以下の考察において、フッサールの人間的主観性の両義性の意味をその自我論的存在構造において解明し、そのことを通して人間的主観性と世界との根源的な相関関係の構造をも顕らかにしたいと思う。

(二)

わたしは世界的現実性を経験し、世界に〈わたしに対する世界〉という意味を与えている主観としての自我であると同時に、自己を包括的世界の中の客観的成素としても経験するという人間的主観性のパラドクスを、フッサールは超越論的自我と人間自我とを区別して考えるという仕方での解消することができる。とみる。

「具体的に十分に考えるならば、わたしは心をもった身体であり、精神物理的实在性であり、そ

のようなものとして世界に、すなわち実在性の全体に属している。わたしはわたしの世界的経験がかかわる他の緒々の客観のうちの一つの客観である。わたしはこの客観としての主観とその経験の主観である自我とを区別しなければならないのではないだろうか。……………わたしはすべてのものを眼前にながめている主観として、まさにすべての客観、世界全体に対する主観である。(一方)わたしは世界全体の中に組みこまれているものとしての自己自身をも見出す。⁽¹²⁾」

そして、さらに『危機』書においては、この超越論的自我と人間自我との関係はより積極的な仕方次第のように述べられている。『(世界を構成する自我としての)相互主観性のすべての超越論的自我は必然的に世界の中の人間として構成されねばならない。したがってすべての人間はそれぞれ超越論的自我を自己のうちに担っているのである。しかしそれは自己の心の実在的部分とかあるいはひとつの層としてそれを担っている(そのようなことは背理である)というのではなく、その人間が現象学的自己省察によって呈示可能な当の超越論的自我の自己客観化であるという、その限りにおいてである。⁽¹³⁾」したがってこの場合、二つの自我はもはや同一の平面上において考えられているのではない。人間自我は超越論的自我によって構成される客観自我であるのに対して、超越論的自我はつねに世界と同時に人間自我に対する主観であるような自我として存在するとされているのである。

しかしこのように超越論的自我とそれによって構成される客観自我としての人間自我とを区別するという仕方次第で、直ちに人間的な主観性のパラドクスは解消されるとみることができるのであろうか。そもそも超越論的自我とは何なのか。そしてそれはいかなるものとして存在するのかという肝心の問いは答えられていないし、それがさしあたり世界を構成する自我であると規定される場合でも、「世界に対する主観」である自我が何故自己を「世界の中の客観」としての人間自我でもあるものとして構成しなければならないのか。そもそもそのような構成がいかにして可能であるのかという根本的問いは、これによっても何も解明されないのである。なるほど『危機』書においては、さらに超越論的自我は超越論的生において、究極的に作動しつつたえず「世界構成」を行なっている絶対的な超越論的主観性である⁽¹⁴⁾という、その「必然的で具体的な存在様式」にしたがって、つねに世界的存在に対して相関的にかかわり、それにそのつど新たな存在意味を与えている自我であると見做されている。⁽¹⁵⁾したがってそれは人間の現存在、つまりあらかじめ与えられている世界の中の人間の現存在に対しても超越論的主観性と其の構成的生の自己客観化の所産という新しい意味を与える自我であるとされるのである。⁽¹⁵⁾

しかし人間的な主観性のパラドクスがこのような仕方次第で解消されうるというためには、まず何よりもわたしが超越論的自我であると同時に人間自我としても存在するという、その「同時性」あるいはその「同一性」がまさに超越論的自我の自己客観化(人間化)の過程を通して呈示されなければならないであろう。ヴァルデンフェルスは超越論的生のうちにおいて展開される超越論的自我の自己客観化の過程を超越論的自我の「世界化(Verweltlichung)」と呼び、その自己理解の段階に対応

して現われる二つの人間化の過程、すなわち「人格的人間化」と「生物的人間化」の過程とさらにそれらを基づけるものとして方法的に遂行される超越論的自我の根源的な「脱世界化 (Entweltlichung)」の過程のうちに、フッサールの人間的主観性のパラドクスの意味を解明しようとしている。⁽¹⁶⁾ われわれもさしあたりその解明の過程にしたがいながら、人間的主観性のパラドクスの問題性を素描することから出発することにする。

超越論的自己省察は「世界の中の客観」としての自己を世界的現実性に関心をうばわれ、自然的態度に身をゆだねている自我として統握する。ところで自然的態度の世界は、わたしがその中に自己を見出す世界であると同時にわたしの周囲世界 (Umwelt) として存在する世界でもある。⁽¹⁷⁾ すなわちそこではわたしは自己を世界の中に見出しながら、その自己を世界に属するものとして、他の世界的存在者のうちのひとつとして、あるいは世界の共同的構成員として表象する。⁽¹⁸⁾ 一方わたしは自然的態度においては、つねに知覚したり、表象したり、思惟したり、感じたり、欲求したりというようなどれかの作用の主体として存在しているのであり、そうする仕方ではわたしはつねにわたしをとりまいていて現実性に顕現的にかかわっている自己をも見出す。⁽¹⁹⁾ したがって自然的経験の世界というのは、わたしにとっては本来的にはそのようなわたしの自然的生のすべての仕方の相関者としてのみ、すなわち「生活世界 (Lebenswelt)」としてのみ存在しうることになるのである。⁽²⁰⁾

フッサールはわれわれがそのような根源的な「生活世界」において、直観的に生きる態度を人格的態度 (personalistische Einstellung) と呼び、それは「われわれが共に生き、言葉を交わし合い、手をさしのべ合いながら互いに関係しあうとき、われわれがいつもとっている態度である⁽²¹⁾」として、それを緒々の自然的生の仕方のうちでもっとも根本的な態度であるとみているのである。ところでこの人格的態度の段階の自己省察においては、わたしは人格として「生活世界」のうちにその一定の場をもち、一定の価値と目的とを体現しているものとして現われると同時に、つねに志向的に周囲世界の中に組み込まれ、それによって動機づけられている実在的世界の主観としても意識されているのである。⁽²²⁾ しかしこのように「人格的態度における主観性が人格的人間というかたちに実在化されたものとして、すなわち世界化されたものとして現われる⁽²³⁾」と同時にその態度に相関して現われる生活世界の中の実在的世界的主観でもあるというのは、この生活世界的な人格的態度の省察の段階に踏みとどまる限りではとうてい克服しがたいパラドクスである。

そこで人格的態度の主観性は一種の「人格的自我の自己忘却」としての自然主義的態度 (naturalistische Einstellung)⁽²⁴⁾ に自己をゆだねることによって、みずからをその逆説的状况から解放しようとする。客観的に理念化する特殊な方法的態度としての自然主義的態度においては、「生活世界」はいかなる価値も目的ももたない抽象的底層としての「単なる自然」に還元される。ここではわれわれ人間は生物的人間として現われる。したがってわれわれの内面的・志向的生は身体的物体に実在的に結びつけられ、それによってさらに因果的に周囲世界に実在的に関係づけられている高

次の層として見做されることになるのである。⁽²⁵⁾ このことによって確かに人間的主観性のパラドクスは外見的には消滅する。というよりもここにはもはや固有の意味での主観性が消失しているのであり、したがって人間的主観性のパラドクスというような問題自体が発生しえないのである。したがって自然主義的態度への転換は人格的態度の主観性のパラドクスをただおおいかくしてしまっただけなのであり、それを根本的に解消させたわけではないのである。

ところでこれまで見てきた人格的態度における「人格的人間」にしても、自然主義的態度における「生物的人間」にしても、いずれも自然的態度 (*natürliche Einstellung*) の世界内部的地盤に立つ主観性の自己統覚であり、その限りでいずれも世界の存在をその存在基盤として自明的なものとして前提にしている人間統覚なのである。したがってこのような世界内部的な自然的態度にとどまる限りでは、世界の存在の存在性が根源的に問われるということとはありえないのであり、ましてやそれが主観性との相関関係において問われるということとはそもそもありえないのである。

そこでフッサールは自然的態度のうちに伏在している逆説的状况には立ち入ることなく、そのような世界内部的地盤をはなれて、一躍超越論的主観性 (*transzendente Subjektivität*) そのもの、すなわち絶対的に作動しつつある超越論的主観性そのものを考察するという「脱世界化」の方途に向かうのである。フッサールはそうすることで、すなわち世界を超えて、絶対的な超越論的主観性に立ち還るという仕方、何よりも世界の存在の存在性を主観的作用との相関関係において根源的に問おうとするのである。そしてこのことによってとりもなおさず「主観性の世界化のパラドクスの解消が外からではなく内から、すなわち外に向けられた生を自己自身につれもどすという仕方

で試みられる⁽²⁶⁾」ことになるのである。

(三)

自然的態度においては人間的な主観性は世界的実在性として、人格的自我あるいは生物的人間として現われるのをみた。ところで人間的な主観性のそのような現われはそもそもいかにして、また何に対して呈示されうるのであろうか。それを可能にするのは超越論的態度 (*transzendente Einstellung*) への転換である。すなわち超越論的主観性の自己省察によって始めて、素朴な自然的態度において非反省的に世界の中にのめりこんでいる自我がまさにそのように世界に関心をうばわれ、世界の構成成分として客観化された実在的主観として存在しているということが顕やかにされてくるのである。わたしが世界に関心をうばわれ、そこに囚われて生きている限りでは、世界そのものもわたしの世界的生も根本的にはわたしにはおおいかくされたままになっている。わたしが自然的態度を転換させて、自然的な経験的生の遂行の流れから身をはなし、世界に無関心な傍観者 (*Zuschauer*) として、その意識体験の流れを反省的に省察するときにはじめて、世界の現実性は、人間の実在性をも含めて、その多様な志向的地平の全体性において顕やかになってくるのである。⁽²⁷⁾

この超越論的現象学的態度においては、世界の現実性はもはや実在的世界そのものとしてではなく、わたしに対する世界、すなわち「超越論的現象」に還元される。このことによって「世界は、したがって客観的なものの全体は特別な意味で主観的なものになる、すなわち主観的な作用と能力の相関者としてのみとりあげられることになる。⁽²⁸⁾」したがって自然的態度における主観性の客観的世界内部的実在性としての現出の仕方もここでは、それに対応する主観性の視向転換との相関関係において洞察されることになる。すなわち主観性が人格的態度においては人格的自我として世界化されるということも、自然主義的態度においては生物的人間として自然化されるということもこの超越論的主観性の自己省察によってはじめてそのようなものとして洞察されるのである。

ところでそのような自然的態度に現われる「世界の中の客観」としての人間自我に対して、つねに「世界に対する主観」として現われる超越論的自我とは何なのであろうか。フッサールはそれをさしあたり、自然的態度においてつねにアノニムに「素朴な遂行者」として作動しつつ (fungierend)、世界構成の意味能作と妥当能作 (die Sinn- und Geltungsleistung) を遂行する自我であると規定する。⁽²⁹⁾ したがってそれはもはや自然的、客観の意味での人間、すなわち世界に属する実在としての人間自我ではありえない。「(超越論的還元においては) すべての自我はその作用と習慣性と能力の自我極としてのみ純粹に考察されうる。……………エポケーにおいて作動しつつある自我極へ純粹な目を向け、さらにそこから生とその志向的・中間形成体や究極的形成体の全体へ向かって純粹に目を向けるさいには、当然人間的なものは何ひとつ現われてこないし、心も心的生活もまた実在的な精神的物理的人間も現われてこない。⁽³⁰⁾」

しかしこの超越論的自我は自然的態度において作動しつつ能作する自我として、その普遍的統覚においてあらかじめ与えられる世界を妥当するものとみなしている自我なのであり、したがってそれによって「世界の中に囚われている自我」としての人間、という自己統覚をも妥当せしめている自我なのである。⁽³¹⁾ すなわち「超越論的自我としてのわたしは、わたしに対して存在する世界を構成したのであるが、……………わたしはその世界構成に対応する構成的結合によって、自己を構成された世界全体の中にある人間的、人格的自我という普通の意味での自我という名のもとに、世界化する自己統覚を行なったのである⁽³²⁾」ということなのである。したがってわたし自身は超越論的自我としては世界を構成しながら、同時に心としては世界の中にある人間的自我として存在するということになる。⁽³³⁾ そしてフッサールは自己自身を人間化し、実在化するというこの自我の自己統覚の概念によって、世界的自我と超越論的自我との同一性は自明なことと理解する。「超越論的自我としての自我は世界性における人間的自我であるものと同一のものである。⁽³⁴⁾」そしてさらに彼は超越論的還元を通してこのようなものとして顕らかにされる超越論的自我と人間的自我との同一性によって、人間的・主観性のパラドクスも根本的に解消されるとみているのである。

しかしフッサールのこのような超越論的自我と人間的自我との同一性の論定には、それを容易にはそのまま引き受けることのできない困難な問題が伏在している。世界の部分としての実在的人間

自我とそれを構成する超越論的自我との間にそもそもどのような同一性が確立されるのであろうか。すべての世界的なものから純化された自我としての超越論的自我と世界的実在としての人間的自我とが同次元において比較されるということさえ原理的にゆるぎされないことなのではないか。インガルデンはフッサールの『デカルト的省察』への注釈において、「もしも二つの自我（超越論的自我と実在的自我）に帰せられるべき固有性が互いに排除しあい、したがってそれらがひとつの対象の統一性のうちにもともに存するということがありえないとすれば、いかにして同一の自我が構成する純粋な自我であると同時に構成された実在的自我でもあるということが可能であろうか⁽³⁵⁾」と批判し、さらにフッサールは超越論的還元を通して「超越論的領域」に入り込むことによって、実在的なものへの道を見失ってしまったのであるということ、したがって超越論的経験の領域においてはもはや固有の意味での事実的自我はそもそも問題になりえないのだと指摘している。⁽³⁶⁾ シュッツも「エポケーは独特の孤独を作り出す……⁽³⁷⁾」というフッサール自身の『危機』書の言葉を引きながら、超越論的自我の絶対的孤独性は事実的自我への道も超越論的我々への道をも閉ざしているとみている。⁽³⁸⁾

フッサール自身も確かに最晩年の著作である『危機』書において、『イデー』以来の現象学の「デカルト的方途 (der cartesianische Weg)」をかえりみて次のように述懐している。「この道 (デカルト的方途) は一躍すぐに超越論的自我に到達するようであるが、これに先だつ証明がすべて欠けているために、この超越論的自我は明白な内容を欠いたまま明るみに出された。そこで人はさしあたっていったい何が得られるというのかまったくわからなくなる。⁽³⁹⁾」すなわち自然的態度の一般的な世界信憑に対する徹底のエポケーから出発し、「われ思う、われ在り」の絶対的明証のうち世界存在の存在性の根源を問うというデカルトに倣った現象学の方途においては、「人間自我」としてのわたしの現存在の自明な事実性すら、そのようなものとしては立ち入って問われることがないまま超越論的主観性の「絶対的基盤」の前に見失われてしまうということであろう。

フッサールはすでにこの『危機』書に先きだつ10年前の『第一哲学』において、この「デカルト的方途」の方法的不徹底さについて明確に自覚するにいたり、そこでは世界信憑を先行的に排除することから出発する「デカルト的方途」に対して、世界の存在・非存在を不問に付したまま、個々の意識作用の仕方の如何にを志向的に分析することによって、超越論的主観性の絶対的経験の領域を開示するという、新たな「非デカルト的方途」の構想を明らかにしている。⁽⁴⁰⁾ これによってフッサールは個々の顕現的意識能作の背後にひそかに共に働いている意識の地平がづきづきに露呈され、さらにそこからその無限に広がる地平意識の全体としての世界も開示されてくると考えたのである。したがってこの方途においては、超越論的主観性の経験領域はもはや「われ在り」の点的な明証存在の意識だけでなく、思念的に経験される世界意識をも包括する経験領域として開示されることになるのである。もちろんそれはもはや自然的、客観的な世界生の意識領域ではありえない。しかし世界的存在のすべてを構成するものとしての超越論的主観性はその「必然的で具体的な存在

の仕方」にもとづいて自己自身をまさに「世界の中の人間」として客観化せざるをえないのであり、⁽⁴¹⁾したがってここでは世界的実在性としての人間的主観性も超越論的主観性の自己客観化の所産として、超越論的主観性の経験領域のうちに内包されているものとしてみられることになるのである。その限りで自然的態度において事実的自我として現われる人間的主観性を超越論的主観性との関係において問うということは、超越論的主観性の自己解明としてのフッサールの超越論的現象学の主題体系にとっては欠くことのできない固有の課題とされなければならないのである。

しかしこの超越論的主観性の経験領域において語られる「事実的自我」としての人間は、トイニッセンも指摘するように、もはや世界的事実としての人間としてではなく、超越論的経験の独特の所与としての超世界的事実性としての人間として語られているとみななければならない。⁽⁴²⁾したがって「超越論的自我」と「人間的自我」との同一性はいかにして規定されうるかという、われわれの当面の問題も世界的存在概念の地平において規定されるような同一性（たとえば有機体の生成におけるような同一性）の問いとしてではなく、構成する自我としての超越論的自我とそれによって構成される意味としての人間自我との間の同一性の問いとして立てられなければならないであろう。⁽⁴³⁾

したがって「世界に対する主観」であると同時に「世界の中の客観」でもあるという、フッサールの人間的主観性のパラドクスの問題性の本質は、たとえば「自己を作動しているものとして把握すると同時に自己を対象としても把握するということがいかにして可能であるか⁽⁴⁴⁾」という仕方ではブレクマンが立てているようなデカルト以来の古い哲学上の問題に解消されうるものではないであろう。フッサールは明らかに「客観としての世界の中の主観性であると同時に世界に対する意識主観でもある⁽⁴⁵⁾」という人間的主観性の両義性に注目しているのであり、したがってそこにみられている問題の本質は、プラントが言うように、「世界に対する主観としての自我が同時に自己を世界の中の客観としても見出すということ、しかも自己自身をその対峙者のうちに客観化しているものとして見出すということではなく、世界がそれに対してのみ存在するところの主観が自己自身を客観として構成するという、しかも世界のうちにある主観であるような客観として構成するという点にある⁽⁴⁶⁾」とみるべきであろう。したがって人間的主観性の両義性としてのパラドクスをその同一性の確立によって解消しようとするフッサールの試みは、とりもなおさず「絶対的に作動しつつある主観性を人間的主観性のうちに自己自身を対象化している主観性として発見しようとする超越論的現象学的還元そのものの完全な自己理解の試み⁽⁴⁷⁾」として展開されることになるのである。

(四)

ところで、フッサールは世界化された人間性から出発して、究極的に作動しつつ世界を構成している主観性に立ち還るといふ、これまでみてきた思惟過程にはまだ決定的な素朴性が残されているということ、したがってこの方途においてはわれわれは依然としてパラドクスにつきまといわれ

までであると反省する。超越論的に還元された世界現象において主観が人格的自我あるいは動物的人間、あるいは作動しつつ世界を構成する自我という様相で現われるのは、哲学的省察を行なっているわれわれ自身の自己忘却が持続している限りでの所与の仕方なのであり⁽⁴⁸⁾、そのように判断中止を行ない、超越論的に省察している自我としての主観性そのものがそもそもいかなるものであるかという肝心の問いがまだ立てられていないからである。

フッサールは『イデー』期には、この判断中止を行なう自我を「絶対的自我」あるいは「純粹自我」という言い方で表現しているが、最晩年の『危機』書においてはそれを「根源我 (Ur-Ich)」とよび、それは世界に〈わたしに対する世界〉という意味を与えている超越論的生の自我極であり、その限りでそれはすべての自然的な現実的存在を超えており、その完全な具体相において考えれば、これらすべてを包括する自我であると規定している。⁽⁴⁹⁾ ところでこの判断中止を遂行する「根源我」が、世界に〈わたしに対する世界〉という意味を与えている超越論的生の自我極であるとするなら、それはつねに作動しつつ世界を構成する自我として規定された超越論的自我とはどのような関係にあるのであろうか。そしてさらにこの「根源我」がその完全な具体相においては自然的な現実的存在のすべてを包括する自我であるとするなら、それは当然世界的現実存在としての人間自我をも包括していることになるわけであるが、それはどのような仕方でののか。要するにこれまでの自我論的分析においては、人間自我と超越論的自我と根源我という三つの自我が区別されて語られてきたことになるのであるが、それらは互いにどのように関係づけられているのであろうか。

フィンクは、すでに現象学研究の古典的文獻となっている論文において、これら三つの自我を現象学的還元の遂行構造に属する三つの自我契機として捉え、それらの本来の同一性を認識することによってのみ現象学的エポケーの真の意味が理解されうると述べている。⁽⁵⁰⁾ 彼によれば、まず第一に人間自我というのはわたしの内世界的経験の生の全体を包括する妥当の統一としての自我であり、その限りでそれは世界に囚われている自我であるのに対して、超越論的自我は素朴に作動しつつ世界を構成する自我であり、その限りで普遍的統覚においてあらかじめ与えられる世界を妥当するものとみなしている自我なのである。したがって判断中止においてもこの超越論的自我そのものは決して世界信憑を中止することなく、むしろそこではより強調したかたちでそれを遂行しているものとして現われる自我なのであり、したがってそれは世界に囚われている自我としての「人間」という自己統覚をもまさにそのようなものとして妥当せしめている自我とみなされているのである。⁽⁵¹⁾ 一方、判断中止を遂行しながら哲学的に省察している自我は世界信憑に対してはいかなる仕方であれ、共にかかわったり、共に遂行したり、同調したりということすべてを拒否する、超越論的に理論的な「傍観者 (Zuschauer)」としての自我であるというのである。⁽⁵¹⁾

そしてフィンクによれば、現象学的還元を遂行しつつ、哲学的に省察するこの自我の主題的領域は世界存在をその根源性において問うこと、すなわち「自然的態度をとる哲学のあらゆる問題を超越する仕方」で、世界の存在に囚われることなく、世界の存在を超越論的妥当として認識しながら、そ

の生において世界が妥当している超越論的主観性へ立ち還ることによって、世界の存在を問う⁽⁵²⁾ ことにあるというのである。したがってそれは決して自然的な世界信憑をまったく超出して、世界からきり離された根源に遡るというのではなくて、むしろ世界信憑そのものをその活発に作動している生動性 (Lebendigkeit) において観照し、分析することによってその根源的な超越論的意義を解明しようとする事なのである。したがってそこに開示される、いわば超越論的世界信憑の相関者としての「世界現象」もまさにこの傍観的自我の省察を通してのみそのようなものとして妥当しうるのであり、さらにそこにおいて超越論的自我がつねに作動しつつ世界信憑を妥当せしめている固有の主観であるということ、したがってそれが世界的現実存在として人間自我の自己統覚をも妥当せしめているということも、まさにこの傍観的自我の超越論的反省によって顕らかにされるのである。その意味でこの傍観者としての根源我によって世界存在をその独特の主観的契機との相関関係において問うという課題は究極的に哲学する自我をその普遍的な自己理解に導びく課題であるということもできるのである。

ところが、フッサールによれば、この根源我は判断中止に着手するさいには、必自然的なものとして与えられるけれども、さしあたっては暗い「沈黙した具体相 (stumme Konkretion)」において与えられるだけなのである。したがってそれを完全な自己理解に導びくという課題は、具体的にはその「沈黙した具体相」を解釈し、言表にもたらすという作業を通して遂行されなければならないのである⁽⁵³⁾。そしてその作業を通して、人間自我という世界的実在性の意味がまさにその根源我の「具体相」においていかにして構成されるかということ、すなわち超越論的自我の自己客観化の所産としてのそれがいかにしてそのようなものとして構成されるかということも解明されてくるであろう。そこでわれわれはさしあたり、世界に〈わたしに対する世界〉という意味を与えている根源我がその世界構成の能作において、いかにしてあるいは何故に超越論的自我として作動し、あるいは人間自我として機能するのかということ、すなわちその自我分裂における必然的同一性がいかにして可能であるかということとを解明するという方途で当面の課題に着手することにする。

フッサールは判断中止において到達する根源我の本質構造を絶対的孤独性として規定する。⁽⁵⁴⁾ 一切の自然的、世界的なものを徹底的に純化することによって得られるこの根源我にとっては、全世界と同時に全人類が失なわれているのであり、したがってそれはもはや汝と呼ぶべき相手やわれわれと呼ぶべき仲間や共同主観の共同体をも喪失している、まったくの孤独のうちに存するという事なのである。それはたとえば理論的に正当づけられる我執からであれ、あるいはロビンソンクルーソーのような難破者のように偶然からであれ、人間の共同社会から切り離されている単独者というような、結局は依然として社会に帰属しているという自己意識の基盤のうえに存している孤独者なのではない。つまりそれはほかの自我のうちのひとつの自我といったような人格的自我としてではなく、絶対的に人称変化しえない唯一の自我とみなされているのである。⁽⁵⁴⁾ ここでは根源我がただ単にいかなる他者とも交わらないということだけでなく、究極的には「絶対的主観性としてのわ

たしはわたしと同等のものを決して知らない⁽⁵⁵⁾」ということが語られているのである。

したがって、フッサールによればそれは本来曖昧に「わたし」とよばれているにすぎないのであり⁽⁵⁴⁾、わたしが反省しつつそれをそう名づけるばあいには、〈世界を現象として問題にしているのはわたしであり、エポケーを遂行しているのはわたしである〉というような仕方では、曖昧に表現する以外にいいようのないものであるというのである⁽⁵⁴⁾。それは要するに〈わたしはわたしである〉というほかにいいようがないという、本質的曖昧性によって語られている自我なのであり、⁽⁵⁶⁾ それはたとえば「わたしは言う」という時の「わたし」のように人称代名詞の秩序のもとで語られうるような、ひとつの自我という意味なのではない。⁽⁵⁶⁾ したがってそれは何らかの意識作用において顕現的に現われるという様態においてはじめて生成し、そしてその意識作用の消滅とともに無の中に消え去るというような自我なのでもない。それは内在的時間の統一として、すべての意識作用において持続的に支配する絶対的に同一の自我として見做されているのである。「すべてのコギトは生成しては消滅して行く。しかしその純粹自我は、すなわち超越論的自我極は生成しなければ消滅もしない。⁽⁵⁷⁾」すなわちそれはすべてのコギトの登場と退場を保証する構成的、普遍的自我同一性としてつねに現存しているというのである。

その意味でフッサールは、「『我思う』はわたしのあらゆる表象に伴いえねばならない⁽⁵⁸⁾」というカントの命題はこの純粹自我についても妥当するというのである。⁽⁵⁹⁾ しかしカントにとって重要なのは「権利の問題 (quid juris)」なのであり、したがってこの命題によって彼が語ろうとしていることは、わたしはわたしの知覚作用とか思惟作用とかという意識作用をいつでもわたしのものとみなすことができるということが経験の可能性の最高の制約である、ということにすぎないのである。これに対してフッサールにとっては、「純粹自我」はもはやそのような単なる論理的緒制約の総体とといったようなものとしてではなく、絶対的事実としてみなされているのである。すなわちそれは権利上の実体というようなものとしてではなく、われわれの誰でもが「還元」を行ないさえすれば、ただちに手に入れることのできる現実的意識の主観としてみなされているのである。⁽⁶⁰⁾ もとよりフッサールは、超越論的自我極としての純粹自我がわれわれの意識体験においてつねに顕現的に、事実に現われているというのではない。われわれがエポケーにおいて超越論的主観性の生に反省の目を向けさえすれば、純粹自我はいつでも顕現的に、対象的に現われうるということなのである。たとえば「わたしはある家を知覚している」という作用を反省するとき、わたしはそこに素朴に作動しつつある自我を対象的に把握することができる。しかしその場合反省しながら、その作動しつつある自我を対象的に把握している自我そのものは対象的に把握されているわけではない。けれどもフッサールによれば、自我のこの「非対象的存在」というのは、ただ「注意されていない」、「把握されていない」ということを意味するだけのことであって、それはより高次の反省によっていつでも「現に存在する自我」として対象的に顕現化されうる構造をもっているというのである。⁽⁶¹⁾ したがって純粹自我はその生きいきとした現在においてはいつでも対象的に把握された自我とまだ対

象的には把握されていない自我という二重の存在構造をもって、事実的に機能しているということなのである。⁽⁶²⁾

ところでそのような存在構造をもつ純粹自我をまさにそのようなものとして統一的に統握するということはいかにして可能なのであろうか。つまり反省的に措定される自我の対象性と反省的には措定されない自我の非対象性を同時的に必然的連関において、それが呈示されるがままに記述するということにはたして可能なのであろうか。フッサールは、たとえば、いま持続的に家を考察している自我と「わたしが持続的に家を考察している」ということを反省する作用を遂行する自我との間には時間的隔たりはないということ、したがってわたしは反復的反省をくりかえすことによって、わたしが生きいきとした作用において素朴に作動しているものとして对象的に把握されている自我であると同時にそれを反省的に把握している自我としても機能しているという事実を観取することができるというのである。⁽⁶³⁾そしてさらに、フッサールによればわれわれはより高次の反省によって、それらの自我とその多様な作用の全体を見渡しながら、それらを同一化している自我をもつきとめることができるというのである。こうして様々な作用において無限に多くの様相において現われる自我極は明証的に、唯一の、同一的自我であるということ、そしてその同一の自我が多様な作用と作用主観に自己分裂しながら自己同一性を保持しつづけているということが顕らかにされるというのである。⁽⁶⁴⁾

しかしここには、自我極としての純粹自我の同一性がこのような反省作用によってはたして基礎づけられうるものであろうかという問題がある。様々な意識作用において顕現的に現われる自我を同一の自我として確認する反省は反省しつつ、作動している自我の同一性に基づいてそのように確認しているのである。ところがそのつど現われる自我をそのように対象的に反省している根源的な純粹自我そのものはつねに反省の対象から身をはなしている自我なのであり、したがってそれがみずからの同一性を反省的に確認するということが不可能なのである。

フッサールは晩年になって、この先反省的自我の同一性をすべての意識作用において内在的時間の統一として、持続的に支配している絶対的自我の同一性として理解し、その内在的時間性において究極的に作動している根源的自我の存在様態を「生ける現在 (lebendige Gegenwart)」として把握しようとしている。そのつどのコギトにおいて反省の対象となる自我が「たったいま」働いていた自我として時間化され、流れ去って行くのに対して、反省しつつ作動している根源我はまさにその反省された自我を「たったいま」働いていた自我として流れ去らしめつつ、「やがて」くる自我を「いま」働く自我として作動せしめるという仕方、そのつどのコギトにおいて現われる自我を時間的に流れ去らしめながら、それ自身は時間的に流れることなく、そこから一切の時間的流れが湧き出るところの「根源的現在 (Ur-Gegenwart)⁽⁶⁵⁾」あるいは「静止するいま (nunc stans)」として根源的に機能しているというのである。⁽⁶⁶⁾

したがって「根源的現在」としてのこの根源我はあらゆる時間化と時間の源泉として、潜在的に

は超越論的主観性の経験領域において時間化的に構成されるものとしてのすべての世界存在を包括しているということになるのである。その意味で、フッサールは超越論的生の自我極としての根源我はその「完全な具体相」においては世界的存在のすべてを包括する自我であるというのである。⁽⁶⁷⁾

(五)

ところで根源我をその「完全な具体相 (volle Konkretion)」において考えるということのうちにどのような意味がこめられているのであろうか。トイニッセンによれば、フッサールが「具体的なもの (das Konkrete)」という概念を使用するときには、それに主観性の世界的側面を強調する機能をもたせているという。⁽⁶⁸⁾ もちろんこの場合、主観性の世界的側面といっても、超越論的主観性のそれである限り、それによって人間自我の個別性や実在性としての具体的な属性が意味されているのではなく、超越論的主観性の自我が世界をその構成内容として自己のうちに包括しているということが強調されているということなのである。⁽⁶⁸⁾

したがって自我がそのようにその志向的生の多様な流れとそこにおいて存在するものとして構成される対象においてのみ具体的でありうる⁽⁶⁹⁾ということは、単に世界の意味が存在的に自我を前提にしているというだけでなく、逆に「自我は世界なしには、すなわちそれによって構成される対象なしには、それが現にあるところのものとしての具体的な超越論的主観性ではありえない⁽⁷⁰⁾」ということなのである。したがって唯一の絶対的に存在する自我としての根源我も端的に世界から独立した仕方では存在しうるものではなく、それはまさに世界を構成するという機能を通して、すなわち超越論的自我として世界にかかわることによってのみ、具体的に必然的に存在しうるということなのである。ところで超越論的自我極としての純粹自我がすべての世界的存在を構成する自我として機能しうるためには、その「必然的で具体的な存在の仕方」にもとづいてまず何よりも自己自身を世界的な人間的主観性のうちに客観化しなければならない。⁽⁷¹⁾

したがって、根源我をその「完全な具体相」において自己理解に導びくという、われわれの当面の課題はまず何よりもその自己客観化の所産としての人間という意味がいかにして構成されるかという問いの解明を通して超克されなければならない。勿論、超越論的経験領域におけるこの自然的人間としての自己構成の解明はもはや決して自然的態度への素朴な帰還を意味するのではなく、⁽⁷²⁾ それはそのような人間化的構成を超越論的に照らし出す過程として展開されることになるのである。⁽⁷³⁾ 自然的生のこの人間としてのわたしは、世界をわたしの周囲世界として経験し、⁽⁷⁴⁾ 自己自身をその世界の中に見出しながら、みづから自己をその世界に属するものとして、⁽⁷⁵⁾ 他の世界的存在のうちのひとつとして、あるいは世界の共同構成員として表象する。⁽⁷⁶⁾ したがって、自然的生の人間の意味には、すでにそれが世界の共同構成員として、本質必然的に「相互に対して存在する」ということ⁽⁷⁷⁾が、すなわちわたしはわたしに対して存在する他者を媒介にしてはじめて人間になりう

るといふことが含まれているのである。⁽⁷⁸⁾

フッサールはこの自然的態度における人間存在についての一般定立を、他者経験において対象的統一として統覚されて現われる他の人間を自己自身に移し入れるという試みによって積極的に展開する。フッサールの他者経験論においては、わたしはわたしの固有の領域において、心と身体の統一体として現われる対象的統一体を自己投入 (Einfühlung) によって、他の人間として表象するのであるが、フッサールによれば実はその他の人間の表象によって、わたしは同時に人間としてのわたしが他者に対してどのようなものとして現われるかを現前化しているのであるという。⁽⁷⁹⁾ というのは人間としてのわたしは他者に対しては、原理的に他の人間がわたしに対して現われる仕方以外には現われえないからである。つまりわたしは、構成的順序からみて本来的に最初の人間として現われる他の人間⁽⁸⁰⁾の身体的物体の「そこ」に間接現示的に局所づけられている自我としてのみ、すなわち客観的世界の地平における他の人間の身体的物体の空間・時間的場がまさにわたしの身体的物体の「いまーそこ」であるかのように現前化することによってのみ、わたしは自己に対して人間という統一的客観として現われうるといふのである。⁽⁸¹⁾

しかしそのように他者の身体的物体のそこをわたしの身体的物体のそことして現前化するという間接的現示 (Appräsentation) は単に自然的客観としての人間の自己統覚を可能にするだけなのであり、それによってわたしの人間化的統覚の意味が十分に汲み尽くされるとみるわけにはいかない。確かにわたしが自己を人間として統覚するという作用のうちには、自己を自然的な客観存在として統握し、それを客観的周囲世界の中に組み入れるということが含まれている。⁽⁸²⁾ しかし人間化的統覚において、「自己を客観的世界の中に組み入れる」ということは、ただ単にわたしがわたしの身体的物体を机とか椅子といったような客観的事物と同様の世界的客観として統握し、みずからをそれらの自然的客観とともに周囲世界の中に組み入れるということに尽きるものではない。他の人間を媒介してのみ人間になりうるものとしてのわたしは、すでに本質必然的に人間的共同体の中にもその共同構成員として組み込まれているのである。すなわちわたしはあるときは自然的構成員として現われる人間自我であると同時にあるときは人格的人間世界の構成員としての人間としても現われるのである。⁽⁸³⁾

したがって人間が世界の中に組み込まれるということのうちには、机や椅子といった非人間的な世界客観が自然的周囲世界に組み入れられるということとは本質的に異なる意味がこめられているのである。まず何よりもこの机ははじめからひとつの机として客観的世界のうちに存在しているのに対して、わたしは他者を媒介にして、したがって人間的共同体においてはじめて人間になりうるのである。したがってこのように本質必然的に共同体の構成員という意味を伴っている人間は、わたしであれ他のだれであれ、すべての人間は多くの人間の中のひとりであるという意味を担っているということなのである。⁽⁸⁴⁾ その意味で、フッサールは自己を客観的世界の中に組み入れることとしての「わたし自身の人間化的構成はわたしの存在とあらゆる他我の存在との客観化的等置を伴っ

ている⁽⁸⁵⁾」というのである。

トイニッセンはこのような仕方では、わたしがひとりの人間になるという出来事は絶対的に唯一の自我としての根源我がすべての他の人間に等置される「ある人 (jemand)」になる出来事であると指摘し、そして自己をそのような「ある人」として人間的共同体の中に組み入れることによって、まさにわたしは世界客観であると同時に主観でもある人間自我として存在しうることになるのである⁽⁸⁶⁾というのである。

ところで、このような「ひとりの人間」としての人間表象によって、わたしの人間化的統覚が完全な明らみに出されたといえるのであろうか。特定の個人的運命を担い、特定の歴史的状況の中に生きている「この人間」としての、わたしの人間存在の本質はこのような人間統覚によって汲み尽くされうるものであろうか。確かにこれまでみてきたフッサールの人間化的構成の解明は、あくまでも超越論的生の自我極としての根源我をその「完全な具体相」において開示するという現象学的還元の遂行過程としてのそれであり、したがってそのさい、人間存在と構成的意識能作との本質関係の分析から明らみに出されてきたものは、結局は超越論的主観性の「意識一般」という絶対的地盤への見晴らしであり、もはや「この人間」としてのわたしの事実的存在の地平ではありえなかった。そしてフッサールが絶対的に孤独な哲学的に省察する自我から出発し、そこに開示される超越論的主観性の経験の地盤に固執する限りで、インガルデンが指摘するように、フッサールは「現実性」への道をみずから閉ざさざるをえなかったのだといえよう。⁽⁸⁷⁾

しかし、フッサールの関心がもつばら人間存在の超越論的な構成的基底づけにあったとして、その現象学的人間存在論の主題領域を超越論的主観性の領域に限定してしまうことは速断であろう。事実、彼の最晩年の老作である『危機』書、すなわち『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の関心は、明らかに科学的解釈によって規定されたヨーロッパの人間としての、具体的な「この人間」の運命に向けられているのであり、そこではそれを超越論的主観性の本質構造において基底づけることに彼がいかに苦慮しているかということがよく示されているのである。したがってフッサールの現象学が「人間的存在」の事実性を明らみ出すことができるかどうかという問題は、これまでみてきたような自我論的主観性の地盤を超え出る仕方では、特に後期の「相互主観性」論との関係において、さらに吟味される必要があるであろう。

〔註〕

(一)

(1) E.Husserl, *Formale und transzendente Logik*. Husserliana, Bd. XⅦ. S.244

(2) ders., *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. Husserliana, Bd. VI. S.188 (Krisis.)

(3) Vgl. ders., *Erste Philosophie*. Ⅱ. Husserliana. Bd. Ⅷ. S.68f (E.ph.Ⅱ), Krisis. S.82

- (4) ders., *Krisis*. S. 188
 (5) ders., *E. Ph. II*. S. 69f
 (6) ders., *Cartesianische Meditationen*. Husserliana. Bd. I. S. 69 (C. M.)
 (7) 自我論的主観性の本質構造に基礎をおくフッサールの他者経験論の困難な問題については、拙稿「フッサール現象学における他者経験論のアポリア」(『一関工業高等専門学校研究紀要』第9号、1974、所収)において詳しく論じておいた。
 (8) E. Husserl, *Krisis*. S. 184
 (9) ders., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. I. Husserliana. Bd. III. S. 151 (Ideen. I)
 (10) ders., *Krisis*. S. 183
 (11) ders., *Ebd.* S. 266

(二)

- (12) ders., *E. Ph. II*. S. 71
 (13) ders., *Krisis*. S. 1895
 (14) ders., *Ebd.* § 54a
 (15) ders., *Ebd.* S. 275
 (16) B. Waldenfels, *Das Zwischenreich des Dialogs*. (Phaenomenologica. 41), 1971. S. 4ff
 (17) E. Husserl. *Ideen*. I. S. 60
 (18) ders., *Ebd.* S. 59
 (19) ders., *Ebd.* S. 60
 (20) Vgl. ders., *Krisis*. S. 50, S. 126, S. 145
 (21) ders., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. II. Husserliana. Bd. IV. S. 183 (Ideen. II.)
 (22) ders., *Ebd.* S. 183
 (23) B. Waldenfels, a. a. O. S. 5
 (24) E. Husserl, *Ideen*. II. S. 183f
 (25) B. Waldenfels, a. a. O. S. 7
 (26) ders., a. a. O., S. 8

(三)

- (27) E. Husserl, *C. M.* S. 73
 (28) ders., *Krisis*. S. 182f
 (29) ders., *Ebd.*, S. 186
 (30) ders., *Ebd.*, S. 187
 (31) E. Fink, *Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik*. in *Studien zur Phänomenologie 1930—1939* (Phaenomenologica. 21) S. 122
 (32) E. Husserl., *C. M.* S. 130
 (33) Vgl. ders., *Krisis*. §. 59.
 (34) ders., *Ebd.* S. 267f
 (35) R. Ingarden, *Kritische Bemerkungen zu C. M.* C. M. S. 231 Beilage
 (36) ders., *Ebd.* S. 213

- (37) E. Husserl, *Krisis*. S. 187f
 (38) A. Schutz, The Problem of transcendental Intersubjektivität in Husserl. in *Collected Papers* III. *Phaenomenologica*. 22) p. 74
 (39) E. Husserl, *Krisis*. S. 158
 (40) ders., *E. Ph.* II. S. 126ff
 (41) ders., *Krisis*. S. 275
 (42) M. Theunissen, *Der Andere*. 1965 S. 19f Vgl. C. M. S. 104, *Krisis*. S. 181
 (43) E. Fink, a. a. O. S. 155
 (44) Vgl. T. M. Broekman, *Phänomenologie und Egologie*. (*Phaenomenologica*. 12) S. 117f
 (45) E. Husserl, *Krisis*. S. 188
 (46) G. Brand, *Die Lebenswelt*. 1971 S. 105
 (47) E. Husserl, *Krisis*. S. 265

(四)

- (48) ders., a. a. O. S. 187
 (49) ders., *Ebd.* S. 188
 (50) E. Fink, a. a. O. S. 121f
 (51) ders., a. a. O. S. 122
 (52) ders., a. a. O. S. 119f
 (53) E. Husserl, *Krisis*. S. 191
 (54) ders., *Ebd.* S. 188
 (55) M. Theunissen, a. a. O. S. 22
 (56) ders., a. a. O. S. 23
 (57) E. Husserl, *Ideen*. II. S. 103
 (58) I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. B. S. 131
 (59) E. Husserl, *Ideen*. II. S. 101
 (60) Vgl. J. -P. Sartre, *La Transcendance L'Ego*. 平井訳「自我の超越」(サルトル全集『哲学論文集』人文書院所収 181頁)
 (61) E. Husserl, *E. Ph.* II. S. 412
 (62) ders., *Ebd.* S. 89
 (63) ders., *Ebd.* S. 89f
 (64) ders., *Ebd.* S. 90f
 (65) E. Fink, Die Spätphilosophie Husserls in der Freiburgzeit. in *Edmund Husserl* (*Phaenomenologica*. 23) S. 67f, S. 124f
 (67) E. Husserl, *Krisis*. S. 188

(五)

- (68) M. Theunissen, a. a. O. S. 24
 (69) E. Husserl, C. M. S. 102
 (70) M. Theunissen, a. a. O. S. 25
 (71) E. Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. III.

Husserliana. Bd. V S. 114B, Vgl. Krisis. S. 275

- (72) ders., Krisis. S. 267
- (73) E. Fink, Entwurf zur Fortsetzung der *Krisis*. (Beilage XXIVとしてKrisisに所収) Krisis. S. 516
- (74) E. Husserl, Ideen. I. S. 57
- (75) E. Husserl, Ebd. S. 63
- (76) ders., Ebd. S. 59
- (77) ders., C. M. § 59
- (78) ders., C. M. S. 157
- (79) ders., Ideen. II. S. 169, S. 242f
- (80) ders., C. M. S. 153
- (81) ders., Ideen. II. S. 169
- (82) ders., Ideen. III. S. 112
- (83) ders., Ideen. II. S. 204
- (84) ders., C. M. S. 157f
- (85) ders., Ebd. S. 157
- (86) M. Theunissen, a. a. O. S. 83
- (87) Vgl. 註 (35)